二川宿本陣

豊橋市二川宿本陣資料館
ワークシート No.7

本陣

本陣とは、江戸時代、公家・大名・幕府役人などが宿泊や休憩をした施設です。一般的に宿場の中央にあって大きな間口を占め、門・玄関・上段の間を備えた堂々とした建物でした。江戸時代後期の東海道の宿場には111軒の本陣がありましたが、今では二川宿本陣と草津宿本陣（滋賀県）の2か所しか残っていません。

二川宿本陣の変遷

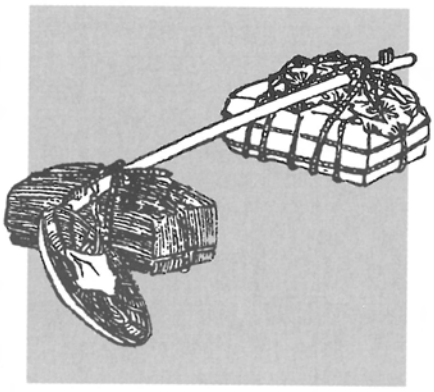
江戸時代の初期は後藤五左衛門が問屋役とともに中町の北側で勤めていましたが、度重なる火災で没落してしまいました。寛政5年（1793）以降は紅林権左衛門が後藤家の名を継いで本陣職を引き継ぎましたが、文化3年（1806）12月の火災で再起不能となってしまいました。そこで文化4年（1807）から明治3年（1870）の本陣廃止まで、馬場彦十郎が現在の地で本陣を経営しました。

二川宿本陣馬場家

馬場家は武田信玄の家臣馬場美濃守信房の流れをくみ、江戸時代初期に伊勢国から二川に移住したと伝えられています。伊勢屋の屋号で酒造業や穀物商を営み、宿内でも有数な商家となっていました。文化3年の火災後本陣職を継ぐようにとの宿役人の願いを断り続けましたが、赤坂代官所の命により止む無く引き受けました。

二川宿本陣の建物

本陣を開設した当初は、間口17間半（約32m）、敷地面積525坪（約1733㎡）、建坪181坪半（約599㎡）と、宿内一の建物でした。本陣を勤めていた60年間に何度も増改築を行い、嘉永年間には板の間を街道から後退させるなど大規模な増改築を行い、安政年間には建坪も233坪半（約771㎡）と増加しました。



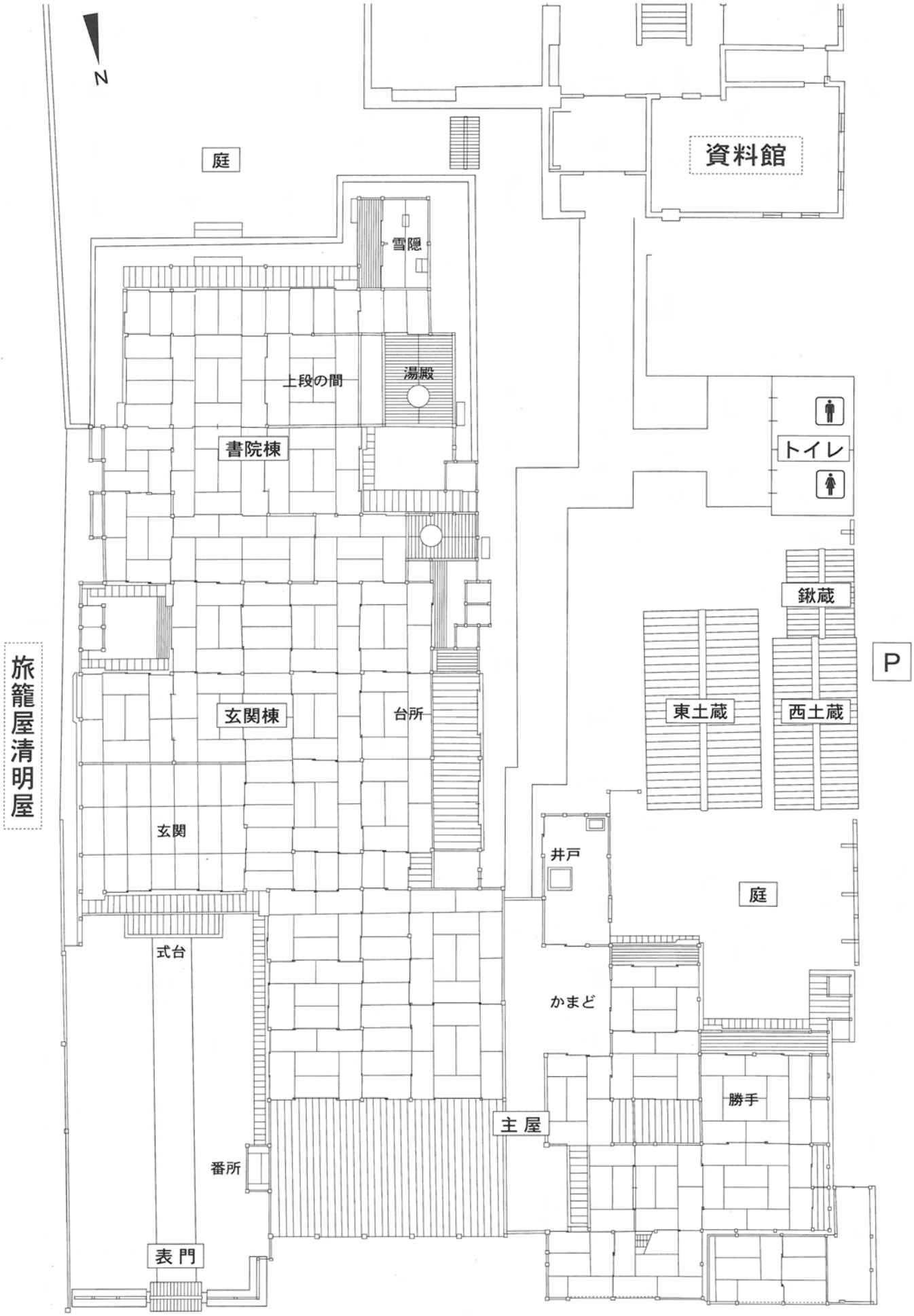
改修復原工事

馬場家では明治３年の本陣廃止にともない、味噌・醤油の醸造業へと職種を変えました。昭和60年馬場八平三氏より豊橋市へ建物が寄贈されたのを受け、豊橋市は昭和62年、本陣を市史跡に指定し、3か年かけて改修復原工事に取り組みました。

工事は国指定の重要文化財建造物の修理に準じて行い、江戸時代末期安政年間の、本陣が最も整備された時代の姿に復原し、平成３年８月から一般公開しました。

主屋	宝暦3年（1753）の火災後に建築。文化4年（1807）の本陣開設時に増築し、板の間・番所などが造られました。嘉永2年（1850）大修理を受けています。
表門	大名などが出入りする本陣の正門。薬医門という形式で、文化4年に建築されました。嘉永3年に大修理を受けています。
玄関棟	文化4年に建築。式台や玄関・台所などの部屋があります。安政元年（1854）の地震で倒壊し、建て直されました。
書院棟	文化4年に建築。大名などが宿泊・休憩する上段の間をもつ書院造の建物です。明治以降取り壊されていましたが、馬場家に残された間取図や他の本陣の調査に基づいて復原しました。
東土蔵	改修復原工事により墨書が発見され、本陣の中では最も古い享保3年（1718）の建物と判明しました。安政2年（1855）に修復されています。
西土蔵	改修復原工事による墨書で、享保18年（1733）に建築されたことが判明しました。

二川宿本陣間取図



東海道